

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02169

研究課題名（和文）情動と身体的コミュニケーションが開く公共性 公共圏の再生に向けて

研究課題名（英文）Affect, Bodily Communication and Publicness: Rethinking the Idea of Public Sphere

研究代表者

時安 邦治 (TOKIYASU, Kuniharu)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：80386797

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：情動や身体は、理性の領域と考えられる公共性や公共圏とは親和性がないと考えられる傾向がある。本研究では、むしろ情動や身体が公共性や公共圏にとって積極的な意味をもつことを明らかにしようとした。個々の研究成果をふまえ、研究課題の到達点として、2022年11月の日本社会学会第95回大会において「情動・身体・公共性」という共同テーマで研究発表を行った。われわれは情動や身体的コミュニケーションの中に公共性につながる可能性を見出した。しかし残念ながら、それが暴力やポピュリズムと距離とり、公共圏の再生を実現できる可能性は十分に論じられなかった。この点は、今後さらなる研究が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インターネットやSNSが社会に浸透するとともに、公共性や公共圏が危機に瀕しているという意見がある。ネット上でヘイトスピーチが横行し、フェイクニュースがまことしやかに流され、人びとの憎悪と対立が激しさを増しているように見えるからである。相互理解のためにもっと理性的になるべきであると言われる。われわれは、むしろ情動や身体を通じたコミュニケーションに公共性につながる可能性を見出し、そこから公共圏を再生させることができるのではないかと考えて、本研究を進めた。その点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：Affect and the body tend to be considered unrelated to publicness and the public sphere, which are thought of as the domain of reason. In this study, we sought to clarify that affect and the body rather have positive meanings for publicness and the public sphere. Based on the results of our research, we presented our research on the joint theme of "Affect, Body, and Public Sphere" at the 95th Annual Meeting of the Japan Sociological Society in November 2022 as the culmination of our research project. We found the possibility of publicness in affect and bodily communication. Unfortunately, however, we did not fully discuss the possibility that this could distance itself from violence and populism and realize a renewal of the public sphere. Further research is needed on this point.

研究分野：社会学

キーワード：情動 身体 公共性 ヴァルネラビリティ 災害ボランティア SNS 美容整形 体罰

1. 研究開始当初の背景

現代の公共圏は、SNSなどのICTを舞台として展開する排外的ポピュリズムによって、開放性や多様性といった特性が蝕まれている。われわれが共同で参加し、社会の方向付けを決めるべき公共圏をいかに再生すべきかという課題は、政治学のみならず社会学においても重要と目されている。

ところで、これまでは公共圏の構成原理として言語実践が重視されてきた。その一方で、身体的・情動的側面が理論的には看過されてきた。しかし、何よりも「身体」こそが、われわれが共存する場において公共性の基礎となる自己表現や態度表明へと駆り立てる基底としてとらえられるべきである。間身体的な関係性を特徴づけるのは、愛情、友情、責任、義務といったポジティブなものから、憎悪や蔑視、恐怖や不安といったネガティブなものにまでいたる情動に他ならない。

現在、世界各地でのポピュリズムの台頭は、外国人憎悪、人種差別、自国中心主義のかたちをとって民主主義社会を脅かしている。ハーバースが『公共性の構造転換』(1962)で危惧した公共性の機能不全に、今なおわれわれは陥っているかのようである。しかし、そうした傾向に抗して、まったく逆のベクトルを持つ、公共圏における連帯もまた広がりを見せている。たとえば、この現象は民主主義を擁護する香港の民衆による2014年の反政府デモ(雨傘運動)や「逃亡犯条例」をめぐる2019年のデモに見いだせる。また、韓国のろうそくデモ、ハリウッドでの女性たちへのハラスメントの告発をきっかけとした「Me Too」運動などもそうである。そして、グレタ・トゥーンベリを代表者とする地球環境変動への各国の無関心の告発である「Fridays For Future」もまた、若者を中心として連帯を広め、世界規模で運動の広まりを見せている。これらの運動がSNSを通じて拡散され、共感と呼び、人々を巻き込みつつ拡大する点に、われわれは情動から生まれる公共性と、公共圏の再生の可能性を見る。

公共圏における協働や連帯の可能性は、グローバルな資本と権力の圧力によって閉ざされたわけではない。これらの現実を前にして、われわれは、これまでとは異なった視点で公共性・公共圏にアプローチすることが求められているという問題意識を共有するにいたった。

そこで、われわれは身体・情動を通じたコミュニケーションの生み出す共同性がどのように媒介されて公共性へとつながるのかを解明し、さらにはそうしたプロセスとその結果にはどのような可能性と限界があるのかを考究するべきであるという結論に至った。本研究は、身体や情動の働きを適切に位置づけ、公共性の概念を再生させることで、その先にある新しい公共圏の概念を展望しようとした。

2. 研究の目的

本項目では、研究の目的と方法を合わせて記載することとする。

本研究の目的は、SNSを媒介としたポピュリズムの台頭が危惧される現代において、「公共性(公共圏)の概念を再生させること」である。その際、情動や身体に着目するというアプローチを採用する。本研究は、「メディア」、「エスニシティ」、「女性」、「教育」、「災害」という5つの観点から、情動や身体が公共性につながる媒介プロセスを明らかにすることを目指した。

本研究では、複数の領域・視座からアプローチすることにより、身体を基底とする新しい公共性の多面的様相を捉えて理論的共通性を浮き彫りにしようとした。そして、身体を基底として情動による共同性が生まれ、公共性が立ち上がるプロセスを明らかにしていく。研究の射程としては公共圏の立ち上がりまでを論じるべきであるが、本研究ではそれを展望しつつも、公共性の成立までを解明の主要な対象とした。

【メディア】 インターネット時代の公共圏の可能性

インターネットを通じて交わされるコミュニケーションを、情動に着目しつつ、排外的イデオロギー運動や、必ずしも群衆の非合理的な活動としては現れない、自己と他者の関係性が生成する場として理論的に検討していく。本研究では、「運動」の場として公共圏を利用しながら、その公開性や共同性といった民主主義の根幹を掘り崩す傾向を、日本やドイツの事例を分析しながら、そこに単なる憎悪表現に回収されない公共性・公共圏の可能性を考察する。

【エスニシティ】 外国人労働者とポリエスニックなシティズンシップ

日本も多くの外国人労働者を受け入れる移民社会になりつつあり、それに対応する共同性と連帯の考究が社会理論の大きな課題である。B.S. ターナーは人間の「無防備さ(vulnerability)」によって人権を基礎づけるが、人権を擁護する社会を創出し維持するためには、人権論をシティズンシップ論と接合しなければならない。情動と身体が生み出す公共性を鍵と考え、情動と身体を基盤とする交流がポリエスニックなシティズンシップの可能性を理論的・哲学的に考察する。

【女性】 女性の身体に対する政治的・医療的介入

「美容整形」に関して、特に女性同士の関係において、彼女たちは互いの身体を観察し、身体加工を勧めあい、賞賛し合うことで、ある種類の共同性（のようなもの）を作り出す。そこで、「美容意識の差異」「女性同士での関わり方」を、WEBを利用した調査票調査によって把握し、インタビュー調査を組み合わせることで、女性たちの意識を明らかにする。それらを踏まえて、女性身体への政治的・医療的介入の中に、公共性を作り出す契機があるのかどうかを検討する。

【教育】 体育スポーツ教育における規律・体罰

日本の体育スポーツ教育では、ともすれば集団の規律を保つという理由で体罰が行われることがある。体罰は人権侵害であるが、ホモソーシャルな一体感を生み出す効果があり、それが教育的に一定の効果を持つものとして容認されてしまう。本研究では、教育における情動と身体の可能性と問題性を多面的に明らかにし、メンバーの意識と行動に多様性を許容する正しい意味での公共意識に沿った体育スポーツ教育のあり方を検討する。

【災害】 災害時に立ち上がる公共性

災害後に活動するボランティアのように、非政治的で、より自己の関心に依拠した社会運動が近年数々ある。ボランティア参加者の行動には、個人的な動機を起点としながら、自分の関わる環境に対する関心の広がりや社会的課題への関与の連鎖が生まれていく契機がみられ、そこには公共性・公共圏へとつながる可能性があると考えられる。災害ボランティアにおけるこのような公共性・公共圏の創出のプロセスと、それが抱える可能性および限界を明らかにする。

3. 研究の方法

すでに「2. 研究の目的」に方法も記載したため、本項目では当初の研究計画から変更となった点を記す。

本研究課題は当初の計画で、日本での調査と外国（ドイツ・イギリス）との研究交流を予定していた。しかし、2020年度から新型コロナウイルス感染症の影響により、どのメンバーも所属機関から海外渡航や国内出張を制限されることとなり、WEBによるアンケート調査を除いて、研究計画に示した調査を実施することができず、研究成果の多くが文献による研究となった。

4. 研究成果

研究期間全体の集大成として、研究組織のメンバー全員が第95回日本社会学会大会において統一テーマで研究発表を行った。時安邦治「B. S. ターナーにおけるヴァルネラビリティと人権

情動・身体・公共性(1)」は、人間の身体的な弱さが人権という公共性の基礎につながる可能性を理論的に考察した。関嘉寛「災害復興における情動と公共性 情動・身体・公共性(2)」は、災害ボランティアにおける情動をともなう交流が公共性につながる可能性を事例を通じて論じた。宮本真也「情動と理由のアリーナとしての公共圏 情動・身体・公共性(3)」は、SNSの現状をふまえて、理性的熟議を重視する従来の公共圏理論の偏りを指摘し、情動と主観性の復権を目指す理論の可能性を指摘する一方、その危険性にも言及した。谷本奈穂「美容をめぐるコミュニケーション 情動・身体・公共性(4)」は、インターネットの質問紙調査をふまえて、美容整形のような美容実践が女性観の競争を煽るよりは、女性同士のコミュニケーションと協力的な関係性を生み出していることを示した。西山哲郎「スポーツでの体罰指導を支える「感情の共同体」 情動・身体・公共性(5)」は、現代社会において分断をもたらす情動のメカニズムが顕著に現れる例として、スポーツの場での体罰指導に注目し、情動を偏ったかたちで積極活用する「感情の共同体」の存在を明らかにした。

いずれの研究も、情動や身体によるコミュニケーションの中に公共性につながる可能性が潜在していることを明らかにしたが、他方で、それが暴力や断絶につながる可能性も認めざるをえなかった。そのことから、公共性から公共圏の再生へとつながる回路は十分に明らかにすることができず、今後研究すべき大きな課題として残ることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷本奈穂	4. 巻 223
2. 論文標題 社会の性愛観・恋愛観はどう変化してきたか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷本奈穂	4. 巻 670
2. 論文標題 美容整形の現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪保険医雑誌	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷本奈穂	4. 巻 49 (10)
2. 論文標題 ロマンティックラブ・イデオロギーというゾンビ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関嘉寛	4. 巻 112
2. 論文標題 東日本大震災とボランティア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市問題	6. 最初と最後の頁 84-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保賢志、沖口誠、西山哲郎	4. 巻 14
2. 論文標題 地域のスポーツ文化に資するオリンピックによるスポーツ教室に関する報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間健康学研究	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00023076	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 時安邦治
2. 発表標題 B. S. ターナーにおけるヴァルネラビリティと人権 情動・身体・公共性(1)
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 関嘉寛
2. 発表標題 災害復興における情動と公共性 情動・身体・公共性(2)
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本真也
2. 発表標題 情動と理由のアリーナとしての公共圏 情動・身体・公共性(3)
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷本奈穂
2. 発表標題 美容をめぐるコミュニケーション 情動・身体・公共性(4)
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西山哲郎
2. 発表標題 スポーツでの体罰指導を支える「感情の共同体」 情動・身体・公共性(5)
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Testuo NISHIYAMA
2. 発表標題 Abuse of Corporal Punishment in Athletic Club Affiliated with Japanese School
3. 学会等名 "Affect, Body and Publicness: Japan Today" at Goethe University Frankfurt
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kuniharu TOKIYASU
2. 発表標題 A Korea Town in Osaka: Migrant Workers and Citizenship in Modern Japan
3. 学会等名 "Affect, Body and Publicness: Japan Today" at Goethe University Frankfurt
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshihiro SEKI
2. 発表標題 Disaster and Volunteer in Japan
3. 学会等名 “ Affect, Body and Publicness: Japan Today ” at Goethe University Frankfurt
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naho TANIMOTO
2. 発表標題 A Bit about Cosmetic Surgery
3. 学会等名 “ Affect, Body and Publicness: Japan Today ” at Goethe University Frankfurt
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shinya MIYAMOTO
2. 発表標題 Zeitwahrnehmung und soziale Beschleunigung im Zeitalter der sozialen Medien
3. 学会等名 “ Affect, Body and Publicness: Japan Today ” at Goethe University Frankfurt
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naho TANIMOTO
2. 発表標題 An International Comparison of Medicines for Cosmetic Purposes: Power Relations and Intimacy
3. 学会等名 The program Seminar organised by Japanese Studies at the Asia Institute in University of Melbourne
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naho TANIMOTO
2. 発表標題 Women in (Social) Sciences: Diversity Brings Creativity, Experiences of Members of the Cercle de la FFJ
3. 学会等名 3rd Meeting of the Cercle de la FFJ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshihiro SEKI
2. 発表標題 Disaster Research based on Action Research
3. 学会等名 The program Seminar organised by Japanese Studies at the Asia Institute in University of Melbourne
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 関嘉寛
2. 発表標題 大学生は被災地で何ができるのか
3. 学会等名 国際学術会議プロジェクト「ポスト地域学時代の日本社会と日本研究」第3回国際学術会議「21世紀の日本社会と若者を考える」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 時安邦治
2. 発表標題 シティズンシップ教育と3つの政治 「市民」に必要な能力は何か(4)
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 谷本奈穂（福間良明編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 648
3. 書名 昭和50年代論	

1. 著者名 宮本真也（高馬京子・松本健太郎編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 250
3. 書名 みる/みられる のメディア論	

1. 著者名 谷本奈穂（石田 佐恵子・岡井崇之編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 212
3. 書名 基礎ゼミ メディアスタディーズ	

1. 著者名 谷本奈穂（小林盾編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 242
3. 書名 嗜好品の社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西山 哲郎 (Nishiyama Tetsuo) (10263188)	関西大学・人間健康学部・教授 (34416)	
研究分担者	宮本 真也 (Miyamoto Shinya) (30386429)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	関 嘉寛 (Sekii Yoshihiro) (30314347)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	谷本 奈穂 (Tanimoto Naho) (90351494)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 “Affect, Body and Publicness: Japan Today” at Goethe University Frankfurt	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関